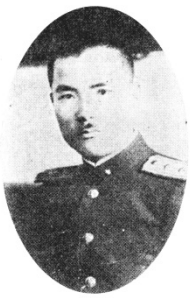
中国人虐殺事件関連現地フィールドワーク

① 亀戸警察署

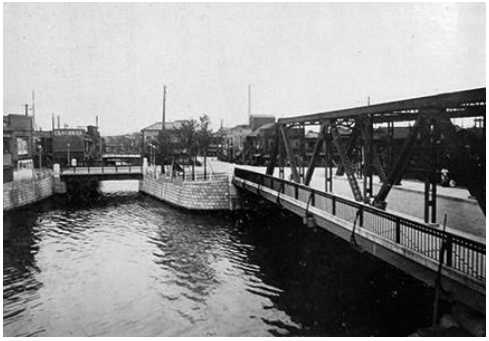
関東大震災の起きた頃、吾嬬町、亀戸町は日本の若い労働運動の活動地域であった。亀戸駅のすぐ北に亀戸警察署があった。ここに王希天が拘束されていたが、それだけではなく、ここは関東大震災時の朝鮮人、中国人、そして若い労働組合活動家の大量検束と虐殺の拠点であった。「三日にも500人以上を検束、ピークの四日夜には 1300 人を超えていた」（『朝日新聞』1923年10月11日）。そして当時の朝鮮留学生の調査によれば、亀戸警察署演武場で騎兵13聯隊（少尉田村春吉）により86 人が刺殺されている。（大韓民国臨時政府機関紙『独立新聞』1923年12月5日）、また、川合義虎（南葛労働会）、平沢計七（純労働者組合：僑日共済会のすぐ近くに住んで活動していた）ら若い労働組合活動家 10 名が虐殺された（（第二次）亀戸事件）。その前には、警察に反抗的であった4人の自警団員も殺されている（第一次亀戸事件）。亀戸警察署署長の古森繁高は、こうした警察署の中だけではなく、管轄区内での大量虐殺の陣頭指揮をとった。



(上下)亀戸警察署の当時と現在(現在はこの辺り。その前は太陽神戸銀行があった)
(左)亀戸警察署から出る亀戸事件遺族（『国民新聞』1923年）
(右)古森署長
　浄心寺の碑

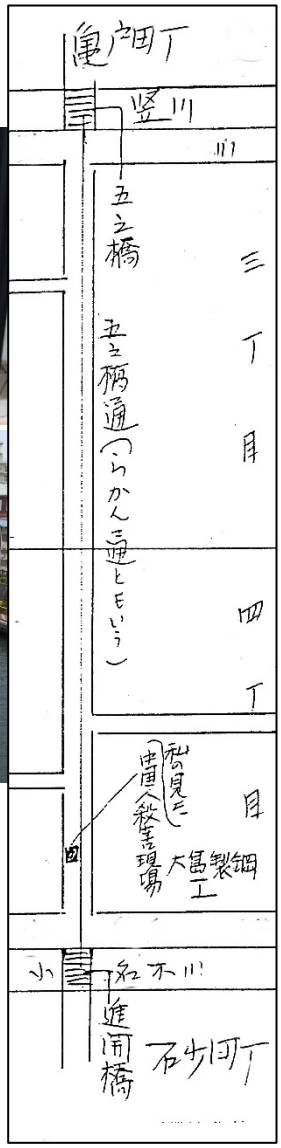
浄土宗赤門浄心寺（江東区亀戸4）には、「亀戸事件犠牲者之碑」がある。

② 五の橋



亀戸駅から南に行くと、高速道路の下が五の橋であり、そこを東西に竪川が走っている。今は暗渠になっているが、その東の端、中川に出るところに逆井橋がある。五の橋の手前の五の橋会館（今は薬局になっているあたり）が、平沢計七のよく使っていたところである。そこから南の小名木川に架かる進開橋に向けて中国人宿舎がたくさんあった。

（写真右は、1930 年頃の竪川）



③ 進開橋

進開橋では中国人虐殺を高梨輝憲さんが目撃した。（地図は高梨証言の一部）

（写真は現在の進開橋と小名木川）

〔高梨輝憲さんの証言：進開橋での虐殺を目撃〕

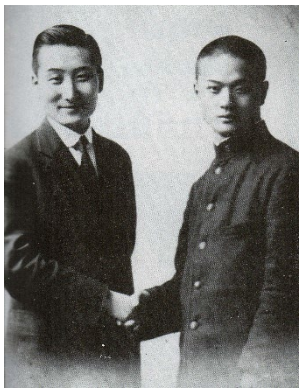
（九月三日）

巡査と別れた私は、さきに来た道を進開橋まで引返えした。ふと橋の上を見ると大勢人だかりがして、何やらざわめいている様子、私は何事かと思って行って見ると、橋の欄干に一人の男が後手に縛られて寄りかかっていた。そのまわりに騎兵の襟章をつけた軍人が三人ばかり立っていた。それを取りかこんでいる群衆は口々に「この野郎朝鮮人だ、やっつけてしまえ」と罵しっている。そのうち軍人の一人は、いきなり軍刀を抜きはらいその男の頭上目がけて斬りつけた。途端に鮮血がさっとほとばしった。斬られた男は「うー」と唸ったがそれ以上の声は立てなかった。その筈である。男はこの時までに既に散々いためつけられてなかば失神状態になっていたからである。軍人は斬りつけるとすぐ両足をかかえて欄干ごしに川の中へ投げこんでしまった。投げこまれた男は一旦沈んだが、やがて顔を水面に出して浮きあがった。見ると長い頭髪が顔面に垂れさがり、血潮がそれにつたわって顔いっぱいに染め、さも怨めしそうな形相をしてにらんでいるかのように見えた。それは芝居でやる四谷怪談戸板流しの場面を想起させるほどの凄惨さであった。

私は謀らずもこのような凄惨な状態を見た。しかし凄惨な状景はこれだけではなかった。進開橋から五之橋の方へ向かって少し行ったところで、またさきに劣らないほどの惨虐な場面を見た。

三人の男がこれも後手に縛られたまま、全身血まみれになって道路にころがっている。側らには騎兵銃に剣を立てた軍人が五、六人立っていた。騎兵銃は三八式歩兵銃とはちがい、銃に剣が装着してあるから、剣を立てればそのまま銃剣になるのである。ここにも群衆があつまり、倒れている男を丸太や鉄棒で殴りつけていた。男は既に人事不省になっていたらしいが、それでも苦しさのためか、時々うめきながら躯を動かすと「この野郎まだ生きていやがる」と罵りながら、更に強く殴打した。軍人はそれを黙って見ている。私は倒れている一人の男に近づいて見ると、男の尻のあたりに銃剣で突いたらしい生々しい創あとがあった。（『関東大震災体験記』〈1974 年〉4 月 1 日発行　アトミグループ発行）より抜萃）

④ 僑日共済会跡



新大橋通りを東に入って緑道公園を北に曲がるとすぐ僑日共済会跡である。僑日共済会は関東大震災からほぼ 1 年前の 1922 年 9 月 21 日に、当時の大島 3 丁目 278 番地（現在の江東区大島 3 丁目 15 番地辺り）に設立された。今は緑道公園になっているが、昔は都電砂町線（38 系統）が走っており、大島三丁目の停留所の付近であった。成立大会には公使館から江秘書官も出席した。委員は 20 名で王希天が委員長になった。（写真左が王希天、右は次の委員長候補であり、震災後に被害者名簿作成の中心となった王兆澄）

緑道公園の入口の向かいあたりにいつも激しく労働争議をやっていた大島製鋼があった。僑日共済会には、医療部、教育部（日本語学校）、慰問部などが設けられて労働者の生活支援などが行われた。また対外的には、賃金不払いや、労働者への暴力行為に対して交渉し、あるいは退去攻撃から労働者を守り、身分安定の行政交渉を行った。

名古屋（22 年 4 月結成）、大阪、京都にも支部ができた。

また、このすぐ近くには（3 丁目 223）、平沢計七が住んでおり、労働争議などを闘っていた。平沢も 9 月 3 日の夜、自宅で逮捕され、亀戸警察署内で虐殺された（亀戸事件）。亀戸警察署特高蜂須賀等にとっては、王希天を中心にする僑日共済会と、同じ頃設立され、似たような活動をしていた南葛労働協会（翌年 1 月、南葛労働会に改称）や平沢計七の純労働者組合とは同じようなものとして認識されていた。

（写真上：共済会跡（右の車のある家の辺り）、下は共済会の仲間）

⑤ 麻一族虐殺現場

大島 6 丁目、中の橋商店街の中程に虐殺現場がある。9 月 3 日、この路上で麻一族を中心とする 23 人の中国人が宿舎から引っ張り出されて虐殺された。大島 6 丁目 633 番地に住んでいた人は一人を除いて原籍が同じ青田一都であり、麻姓が 17 人、邱さんが 2 人、楊、詹、張、徐さんが各 1 人である。

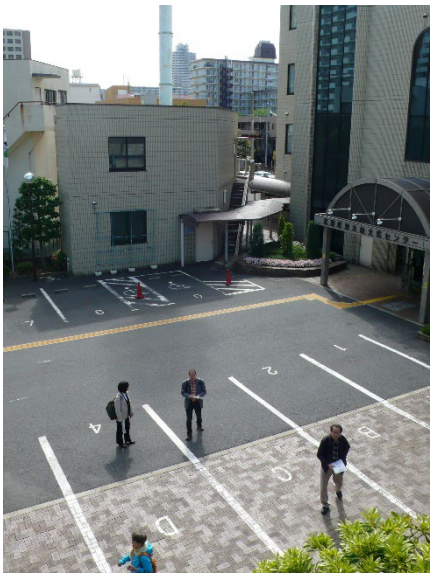
すぐ西側には東京瓦斯（その後公団住宅となる）があり、ここには 9 月 3 日の朝と昼 100 人位の日本人労働者がおしかけ、1 人が虐殺され、1 人が頭部に受傷している。

中の橋商店街北詰、千葉街道を超えたところに、かつて東洋モスリンがあり、そこには野重第三旅団司令部が陣取っていた。この麻一族の虐殺及び東京瓦斯の襲撃も戒厳軍の容認のもとで行われた。

⑥ 中国人宿舎があったところ

大島 6 丁目から、南に下りて、大島 5 丁目と大島 8 丁目の角の辺りも、中国人宿舎が密集していたところである。このあたりの宿舎からも中国人労働者が引っ張り出されて大島 8 丁目の広場で虐殺された。

⑦ 大島町集団虐殺事件現場



現在の東大島文化センターのあたり。9 月 3 日、中国人労働者は、大島町各方面の宿舎から、20 人、30 人とここに連れて来られて、早朝、午後 1 時、午後 4 時を山場として日が暮れるまで、300 名乃至 400 名が虐殺された。10 月 16 日上海の新聞各社は「大島 8 丁目集団虐殺」の唯一の生存者黄子蓮の話として次のように報じた。

9 月 3 日昼、大勢の日本の軍警、青年団および浪人らが、大島 8 丁目の中国人宿舎へやってきて「金を持っているやつはみんな中国へ帰してやるからおれたちに付いて来い」と言った。私たちはそのことばを信じてついて行った。近くの空地へ来ると、突然「地震だ、伏せろ！と言って全員地に伏せさせ、手にした棍棒、鳶口、つるはしなどの凶器で一気に殴り殺した。公認の殺し放題、殺された者は 200 人にもなろうか。私は殴られて気を失ったので、てっきり死んだと思われ捨ておかれた。……

仁木ふみ子「温州人被害場所一覧(512 名)」（岩波ブックレット）によれば、大島 8 丁目の死者は 334 名負傷者 5 名となっている。被災前住所は大島 8 丁目の周進順棧 19、林徳昌棧 7、呉元昌棧 1、黄應發棧 1、林合發棧 1、呉仁昌棧 1、林合吉棧 4、王日豊棧 1、林合昌 9、清渓屋 1 である。

虐殺に関係したと思われる部隊は、戒厳司令部詳報によると、野重第 1 連隊第 2 中隊岩波清貞少尉以下 69 名、騎兵 14 連隊三浦孝三少尉以下 11 名か。

黄子蓮証言以外にも、この事件に関する記録、証言はたくさんある。

(1) 警視庁広瀬外事課長直話「支那人及朝鮮人三百名乃至四百名三回に亘り銃殺又は撲殺せられたり」

(2) 外務省亜細亜局長「支那人王希天行衛不明ノ件」

「本所大島町附近に於て約三百名の支那労働者殺害せられたる事実」

(3) 支那人惨殺事件（陸軍省－密大日記　上海陸軍歩兵少佐小林角太郎作成）

「惨殺せられたるもの百七十余名…その大部分は温州附近のもの」

(4) 木戸四郎が新聞記者に説明した報告

「9 月 3 日正午より軍隊約七名が五名の鮮支人を現場に於て撲殺せるを手始めに続々二三丁目方面より支那人を参々伍々連行し撲殺し午後 6 時迄に約二百五拾名を軍隊、自警団警察にて惨殺せる」

(5) 関東戒厳軍司令部詳報第三巻「震災後警備のため兵器を使用せる事件調査表」

「群衆及警官四五十名約二百名の鮮人団を率い来たり…鮮人は全部殺害されたり」（本鮮人は支那労働者なりとの説あるも軍隊側は鮮人と確信殺害したるものなり）

⑧ 逆井橋

王希天虐殺現場

吉林省出身の留学生王希天（写真上前列右から 2 人目、右は周恩来）は、1918 年「中日共同防敵軍事協定」反対運動を周恩来とともに推進した。1919 年五・四運動においては東京で支援運動を起こし、日本官憲から「反日の巨頭」と目された。

さらに日本に出稼ぎに来ていた中国人労働者の生活と権利擁護のために、1922 年 9 月 21 日、労働者の拠点である大島町 3 丁目に「僑日共済会」を作った。王希天が委員長となった。名古屋（22 年 4 月結成）、大阪、京都にも支部があった。1923 年 5 月中旬には会員 3000 人を下らないまでになった。僑日共済会は、労働者の生活改善・慰問活動、診療活動、日本語教育活動を行い、さらに未払い賃金などの労働相談や労働者を国外退去攻撃から守り、身分安定を求める行政交渉などにあたった。

（写真：中国人労働者の労働現場を視察する王希天僑日共済会会長（中央のコート姿）『王希天小史』所収）

1923 年 9 月 9 日、王希天は、大島町の労働者の様子を見に行ったところで亀戸警察署に逮捕され、9 月 12 日夜、亀戸署から軍隊に引き渡され、その日未明、習志野に向かう逆井橋のふもとで野重第 3 旅団第 1連隊垣内八洲夫中尉、佐々木兵吉大尉等によって虐殺され、切りきざまれて、中川に投げこまれた

（写真：逆井橋での追悼）。

その軍隊による虐殺は日本政府によって隠蔽され続けたが、関係した軍人の日記などによって事実があきらかとなった（『関東大震災と中国人－王希天事件を追跡する』田原洋、2014 年、岩波現代文庫参照）。

⑨ 幽冥鐘

両国の横網町公園には中国の仏教徒から関東大震災犠牲者の追悼のために送られた幽冥鐘がある。震災の報に接した中国杭州及び上海の寺で法要が営まれ、中国国内でこの「幽冥鐘」が鋳造され、1925 年 11 月 1 日に横網町公園に運ばれた。鐘楼は 1930 年に完成。上海の王一亭氏の尽力による。